新聞の投書を読み比べよう

六年生の国語科の学習で、新聞の投書を読み比べる学習を一学期に行いました。投書は、ある出来事やテーマ、身近な問題などについて、考えたり感じたりしたことを述べた意見文です。

中国新聞の投書欄「広場」に海田町出身の日本人初の金メダリスト織田幹雄を顕彰した織田ポールについて青木義和さんの投書がありました。六年生は、「織田ポール」をどうするべきか、青木さんの投書に対して意見を書きました。中国新聞の「ヤングスポット」に六年二組の稲次留奈さんの投書が掲載されました。

青木義和さんの投書

中国新聞（日）

織田ポールを広島に

広島大研究生　青木　義和　66歳

2020年の東京オリンピックまで、あと3年。新国立競技場は大会後、球技専用の施設となる。陸上競技場のトラックはなくなるのである。

旧国立競技場内にあったもので行方が気になるものが二つある。一つは、1928年のアムステルダムオリンピック陸上競技三段跳びで、日本人初の金メダリストとなった織田幹雄を顕彰した「織田ポール」。

もう一つは、秩父宮記念スポーツ博物館である。ポールは移設先が未定で、博物館の移転先も白紙になっている。日本の宝であるスポーツ資料の継承もはっきりしない。この際、このポールと博物館を広島に移してはどうだろうか。

広島県海田町出身で日本のスポーツ史の先駆者となった織田幹雄は、郷土の誇りだ。広島市には、歴代オリンピックの大会プログラムなど織田幹雄資料が多く寄贈されている。

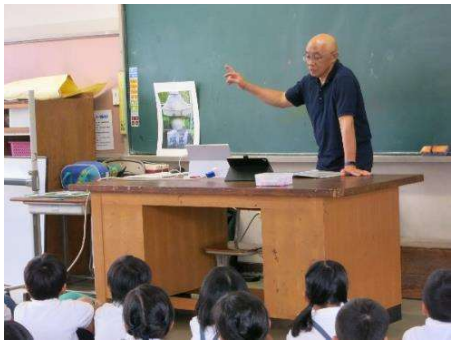
広島市に建設する意義は「スポーツ＝平和」の体現にほかならない。用地は、織田に縁がある広島大跡地がふさわしいと思う。

（広島県安芸郡）

平成二十九年九月六日

青木義和さんは、海田町出身の織田幹雄について研究をしておられる方です。

海田東小学校では、九月二十八日に、五年生に「織田幹雄」について色々なお話をしていただきました。今後も、国語科の海田町に息づく「世界人『織田幹雄』」を紹介しようの学習で協力をしていただきます。



青木　義和さん
（授業の様子）

旧国立競技場内の織田ポール

日本人初の金メダルをとったアムステルダム五輪の三段跳びの記録１５・２１ｍの高さがある。

中国新聞に掲載された稲次留奈さんの投書

平成二十九年九月三十日

ヤングスポット

織田ポールを移して

小学生　稲次　留奈　12歳

6日の広場欄に載っていた「織田ポールを広島に」の投書を読みました。私も同じ考えを持っています。

広島は平和記念公園や厳島神社などがあり、外国人が多く訪れる街です。広島市に設置すれば、世界の人々に織田幹雄のことを知ってもらえるのではないかと考えます。

織田幹雄は日本人初の金メダリストです。でも、広島県内でも今は知る人は多くありません。織田ポールは織田幹雄を記念し、東京の旧国立競技場にあったものです。

出身地の海田町の私たちの学校では、織田幹雄の生き方や考え方をまとめたリーフレットを国語の時間に作成しました。そして、公共施設などに配布し、多くの人々に伝える取り組みを行っています。

しかし、私たちの取り組みだけでは、県内や全国の人々に知ってもらうことは難しいです。織田ポールを広島市に設置することで、知ってもらえるきっかけになると考えました。

（広島県安芸郡）

海田東小学校の国旗掲揚のポールの長さも、旧国立競技場の織田ポールと同じ１５・２１ｍです。

海田東小学校の織田ポール

織田幹雄についての記事

中国新聞　平成二十九年九月十日

天風録

強い者は美しい。日本人初の五輪金メダリストになった三段跳びの織田幹雄さんが晩年、好んで色紙にしたためた言葉である。一つの競技を究めれば、自然に美しい動きになると、強くあろうとする人をたたえているのだろう▲天国の織田さんの目には彼の走りがどう映っただろうか。陸上男子100㍍の桐生祥秀選手がきのう日本人初の9秒台をマークした。10秒00の日本記録を19年ぶりに塗り替える快挙となった。ぐんぐんと加速する力みのないフォームが輝きを増した▲桐生選手と言えば、織田さんの古里広島で開かれる織田幹雄記念国際陸上大会での活躍を思い浮かべる人も多かろう。高校3年だった2013年の大会で、歴代2位となる10秒01で走って衝撃を与えた▲一躍注目の人となってからは故障や不調に苦しみ、9秒台を求める期待に応えることができなかった。4年ぶりの自己ベスト更新が大記録になったのだから、喜びもひとしおだろう▲日本勢にとっても長年苦しんだ「10秒の壁」がやっと取り払われた。広島出身の山縣亮太選手らライバルも続いてほしい。世界の背中はまだ遠い。ホップ、ステップ、ジャンプと大きな飛躍を期待しよう。

2017・9・10

中国新聞　平成二十八年五月五日

潮流

運動部長　林　仁志

織田さんの「三訓」

銀座というと、シダレヤナギが思い浮かぶ。「東京ラプソディ」「たそがれの銀座」といった流行歌ですり込まれたイメージだろうが、私にはもう一つ理由があった。花のダルを持ち帰った故織田幹雄さんである。広島県出身。駆け出しの運動記者だったあるとき、帰郷していた織田さんに話を聞く機会があった。取材が一段落して尋ねてみた。ヤ

都の街角で、枝先めがけて跳びはねる若者がいた。実話なのか、誰かがこしらえたのか。妙に気になっていた。

若者とは、アムステルダム五輪（1928年）の男子三段跳びで優勝、日本初の金メ

ナギの話は本当ですか、と。

「そんなこともありましたかねえ」。明確な回答はなかったが「試みるのは大切」として、競技者の姿勢について語られた。80歳余りとは思えぬ迫力。柳の話などどうでもよくなったのを覚えている。

要約するところだ。必要なのは「念じる・探り当てる・努める」。頂点に立つ、あるいは記録を塗り替えるでもいい。目標を立て、達成に向けて熱を持ち続ける。試行錯誤して最適な鍛錬の仕方を見つけ出す。うまずたゆまず道を切り開いていく。

最後に「運動選手に限った話ではありません。あなたも頑張って」という言葉をいただいた。そう、織田さんは新聞社のスポーツ記者として活躍、運動部長も務めた「大先輩」だ。以来、「念じる」以下をひそかに「三訓」と名付け、胸にたたんできた。

何年ぶりだろう。先日、織田幹雄記念国際陸上競技大会（広島市）の会場に足を運んだ。リオデジャネイロ五輪出場が懸かった選手もいれば、小中学生もいる。それぞれが念じ、探り当て、努めてきた成果を競い合っていた。

第50回の節目となった大会でかみしめた。織田さんの思いは新しい世代に確実に伝わっている。今も輝きを放っている、と。

ウェブサイトへの転載については，中国新聞社の許諾を得ています